

以下は岡知史(2001)『やさしいコミュニティワーク：エコロジカル・ソーシャルワークと5つのアプローチ』のpp. 6-9を抜粋したものです。

方法論としての学問

「方法論としての学問」とは、たとえば経済学とは経済学的に現象を解明することであり、物理学とは物理学的に現象を解明することです。社会福祉学とは社会福祉学的に現象に迫ること、目の前の現象に接近する方法のひとつとして社会福祉学があるということなのです。

例をあげましょう。ここにホームレスの人々がいる。その現象を心理学的にとらえれば、ホームレスになった人の動機の解明、あるいはホームレス状態になったことの心理的影響を調べることになるでしょう。都市社会学的にとらえれば、その場所にどうしてホームレスの人々が集まるようになったのか、全体の都市の構造から明らかにするかもしれません。労働経済学的に言えば労働市場から拒絶された人々として把握されるかもしれません。つまり、現象は一つでも、それをとらえる方法はいくらかでもある。その方法が諸学問であり、その一つが社会福祉学であるというわけです。

考える方法を学ぶ

とすれば、社会福祉学を学ぶことは社会福祉学的に考える方法を学ぶことです。誰かが考えた結果や社会福祉サービスの名前を暗記することではありません。社会現象はたえず変化していきます。社会福祉の制度も法律が変われば、がらりと変わります。その法律改正ごとに変ってしまうものが学問の本質であるはずはありません。

この「方法論としての学問」を伝えるには、狭い分野でも深いことを学ぶことのほうが良いでしょう。たとえば考古学を学ぶときに、世界各地の遺跡の概要をまんべんなく説明するより、一つの遺跡から出てきた一つの土器のかけらに焦点をあて、そのかけらから何がわかるか、それをどのようにして明らかにするのか、どうしてそれが明らかになるのか、その結果をどのように疑えばいいか、そういったことを詳しく講義で行われたら、考古学的に考えるとはどういうことかが明らかになるでしょう。

繰り返していえば、学問とは要するに、現象をどのように見るかという方法を確立することです。逆にいえば、その学問を修めないと現象も見えてこない。たとえば天文学を学ばなければ望遠鏡をのぞいても星が光っているのが見えるだけで、そこにどういう現象も見えてこない。自然科学であれば、このことは自明であるように思えるのですが、社会科学であるとこれがわかりづらい。内田義彦はこのあたりのことを次のように書いています。

まず明確な問題があって学問がそこからはじまるというわけではありません。現実的な問題は、学問的な解決を必要とすべき問題として、学問以前に、あらかじめ明確に意識されているというかたちでは存在してはいないのです。…何か問題があるらしいが、何を問題とすべきか、問題とすべき対象は見えない。日常語の世界にうずまり日常語だけに頼ってはいは、学問的に解明することができないだけでなく、解決すべき問題そのものも明確には捉えられない。で、学術用語を組み合わせた概念装置をつくり、それを駆使することで問題を発見し解決する。¹

社会福祉を学ぶ学生たちは、この部分を誤解していることが多いように思います。つまり現場に出て、そこで現場を見れば、そこで問題が自然に見えてくると思っている人が多いのです。たとえば実習に行った学生がよくいう不満は「私の行っている実習先には専門性がない」ということです。それは現場を見るだけで問題が見えると思いこんでいることからくる誤解が多いものです。「専門性が見える」ということは、それだけである程度専門性が身についているということなのです。

現場で働く若いソーシャルワーカーのなかにも、学問について同じような誤解をしている人がいます。そういう人は「福祉は現場ですよ。大学では何も学べない」と、学生に言い、「私なんかは学校では何も勉強しなかった」と豪語したりします。そういう人の話を聞いていると、内田義彦の言葉を借りれば「何か問題があるらしいが、何を問題とすべきか、問題とすべき対象は見えない」という状態にあることがわかります。その人の話に出てくるのは「わがままな人」「落ち込んでいる

¹ 内田義彦(1985)『読書と社会科学』岩波新書, p. 147. この内田義彦の本は社会科学について非常に易しく、しかも重要な本質について解説した本ですので一読を勧めます。

家族」「融通のきかない行政」といった「日常語」で描かれた世界であり、個人の経験と勘だけで動いているように見えます。「大学で学んだことは役にたたなかった」と言ったりしていますが、役にたたなかったのではなく、役にたつように使えなかったのであり、学んだことを使うだけの力がないのです。たとえていえば天文学を学ぶのに、望遠鏡があるということを知っているが、望遠鏡の使いかたがわからない。だから「望遠鏡なんて役にたたない」と言っている人のようなものです。

では、この「方法論としての学問」を問うような問題を試験として出せるでしょうか。残念ながら、それは非常に難しいと思います。「方法論としての学問」をどれだけ身につけているかは、混沌とした現象を切り口鋭く分析していく力をどれだけもっているかで測ることができます。たとえば具体的な現場の事例を出して、それを自由に分析させるという論述式の問題で測ることができるでしょう。どれが正解、どれが間違っているということではなく、拙い分析と鋭い分析という連続的な差があるだけで採点は極めて難しくなります。



余談：実習ノート

このような「方法論としての学問」がどれだけ学生たちの身につけているかがわかるのは、私にとっては実習ノートのコメントをつけるときです。自分の目の前で子どもが遊んでいる。その現象をいかに観察し、いかに自分がかかわっていくかをノートに書いてもらったときに、そこにどれだけソーシャルワークの視点が入っているか、そしてそれがどれだけ妥当なものかということによって、現象に迫る方法としての社会福祉学の理解の程度がよくわかります。4年で、学生たちは驚くほど、理解が進んでいる人と遅れている人の差がでます。あるとき私は一人の学生の実習ノートに「表面的なことしか見えていない」と厳しく書きました。その人は「私がどんな実習をしたのか、横で見ていたわけでもないのに、なぜそんなことがわかるのですか」と、ずいぶん反発していました。そこで、その人に、同じような実習先に行った別の人の実習ノートを読ませたのです。すると、非常に驚き、私が書いていたコメントの意味が初めてわかったと言っていました。それで自分が社会福祉学科の授業をいかに「甘く」見ていたかを悟ったそうです。